vinetur

2026年の南半球のワイン生産量、3%減の4,700万ヘクトリットルに

OIVによると、気候ストレスで南半球の生産量は平均を7%下回った。南アフリカは10年ぶりの豊作

2026年11月19日（木）



国際ブドウ・ワイン機構（OIV）は、11月18日（水）にフランス・ディジョンで公表した速報値で、気候面の圧力や市場環境が生産量を左右し続けるなか、2026年の世界のワイン生産量は2025年に近い水準にとどまるものの、過去5年の平均を下回る見通しだと発表した。

OIVによると、収穫が上半期に終わる南半球の2026年の生産量は、約4,700万ヘクトリットルとなる見込みだ。世界のワイン生産量の約21%に当たり、2025年比で約3%減、過去5年の平均を7%下回る。オーストラリア、アルゼンチン、チリなど主要生産国で不振が続き、一部の国では増産となったものの、地域全体の生産量は平均を下回ったと同機構は述べた。

OIVによると、生産国ごとに天候は大きく異なった。霜、ひょう、暑さ、水不足によりブドウの収量が減った地域がある一方、降雨パターンの改善や病害の発生圧力の低下を受けて、ブドウ畑が回復した地域もあった。また、複数の国では市場環境に関連する生産や収穫の判断も結果に影響したという。

2026年の南半球最大のワイン生産国は南アフリカで、生産量は1,130万ヘクトリットルと推定された。2025年比で10%増、過去5年の平均を14%上回る。OIVによると、生育初期の好天と、複数の地域で水不足によるストレスを和らげた2月の降雨が増産を後押しした。同機構は、南アフリカにとって10年ぶりの高い生産量だとした。

アルゼンチンは南米最大の生産国の座を維持したが、生産量は減少した。OIVは同国のワイン生産量を970万ヘクトリットルと推定。2025年比で10%減、過去5年の平均を11%下回る。国内最大のワイン産地メンドーサで霜やひょうがブドウの収穫に打撃を与え、ワイン生産量の減少につながったと同機構は述べた。

チリの生産量は950万ヘクトリットルと推定された。不作だった2025年からは13%増加したものの、過去5年の平均をなお13%下回る。OIVによると、2026年も暑さと続く水不足が収量を抑え、2025年から小幅に回復したにもかかわらず、チリは生産量が比較的低い水準にとどまる3年連続の年となった。

オーストラリアでは、南半球の主要生産国の中でも特に大幅な減産となった。OIVは同国のワイン生産量を910万ヘクトリットルと推定し、2025年比で19%減、過去5年の平均を23%下回るとした。降雨不足、晩春の霜、熱波、局地的な洪水が生育環境を損なったという。また、市場環境が収穫の判断に影響した可能性も指摘した。主要生産州全体でブドウの破砕量が減少し、減少率は南オーストラリア州よりビクトリア州とニューサウスウェールズ州で大きかった。

ニュージーランドの生産量は320万ヘクトリットルと推定された。豊作だった2025年から15%減、過去5年の平均を5%下回る。OIVによると、収穫量の減少には、近年の豊作を受けた意図的な生産調整も反映されており、供給を市場需要に近づける効果があった。

ブラジルは地域内で比較的好調な国の一つとなった。ワイン生産量は310万ヘクトリットルと推定され、2025年比で10%増、過去5年の平均を22%上回った。OIVによると、国内最大のワイン生産州であるリオグランデ・ド・スル州では、2026年も回復が続いた。冬季に十分な低温に恵まれたこと、おおむね良好な春の気象条件、病害の発生圧力が低かったことが増産の主な要因だとした。

ウルグアイの生産量は70万ヘクトリットルと推定され、2025年比で13%増、過去5年の平均を7%上回った。OIVによると、春の生育が良好だったこと、開花期に乾燥した天候が続いたこと、1月に適時の降雨があり水不足のストレスが和らいで果実の発育が促されたことが、収穫を後押しした。病害の発生圧力が低かったことも、シーズン終盤まで収穫量を確保する助けとなった。

OIVの推定値からは、南半球のワイン産業が地域差の大きい天候と慎重な生産判断に引き続き直面していることがうかがえる。南アフリカが大幅な回復で際立つ一方、オーストラリア、アルゼンチン、チリでは気候関連の不振が重しとなり、一部市場では商況の悪化も影響した。